

---

# **最後の桜**

曇坂陽向

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最後の桜

### 【Zコード】

Z2609V

### 【作者名】

曇坂陽向

### 【あらすじ】

時は幕末。戊辰戦争が勃発し、世の中は混乱していた。そんな時代に翻弄された幕末最強の剣客集団、新選組。病床に伏していた沖田総司は、死に際、仲間への想いを語る

(前書き)

物語を進める上で  
史実と異なる部分が多少あります。  
読者様の新選組のイメージとは違つ  
印象を与えてしまう可能性も  
ござりますので、了承下さい。

桜が舞つ頃。

「また必ず来る」

「…ええ、楽しみにしてますよ」

なんとなく、分かっていた。  
本当になんなく、だが。

「ねえ」

\* \* \*

「ねえつたら」

何度も何度も問い合わせるが、その黒くて丸い猫はジッと自分を睨みつけるだけ。

「かわいくない奴だなあ。君、土方さんそつくりだよ。たぶん野良だよね」

彼、沖田総司は、ある家屋の縁側にいた。ここで病床に伏している彼は、布団に入るのも暑く、重い体を無理やり引きずり縁側で涼んでいる。

「ぐつ、」「ほつー。」「ほつーー。」

口を押された手には、赤黒い血。

「まだだ。お前、移るよ、不治の病が」

[冗談っぽく言ひ沖田の笑みには血潮が混ざる。]

猫は少しも鳴くことがなく、家の外に出て行った。

「おこー何してんだ沖田君ー。」

「？」

急に聞こえた、聞き慣れた声。

(また見つかっちゃった)

そう気には止めないようや、沖田は懐紙を取り出して血を拭つ。

「松本先生」

「君は本当に懲りないなあ。布団に入りなさい」

松本良順、蘭方医である。

「嫌ですよ。こんなに暑いのに布団になんて入ってられませんし、暇ですもん」

「全く君は……」

「こつもの」とある。

松本は諦め、沖田の側に座つた。

「ねえ松本先生。」

「何だい？」

「近藤先生は、元気にしていらっしゃるのかなあ」

「…近藤君のことだ。今も勇敢に戦っているだらうよ」

「…そうですね」

沖田はただ、にっこりと微笑んだ。

「最近、よく昔を思い出すんですね」

突然、ポツリ、と沖田が呟くように言った。

「昔、とは？」

あまりに唐突なので、松本は少し驚いた風である。

「そりやもちろん、京にいた頃です。僕も元気で、それはもう慣れましたよ」

そう語つて小ちく笑つ。

「あまりずっと見ていた訳じゃないが、君はいつも楽しそうな風だつたな。」

松本もつられて笑った。

「屯所で暴れて、町で暴れて…。まあこの場合暴れるの意味が大いに違いますけど。」

「君はなかなかの問題児だつたそうだね」

松本も誰から吹き込まれたのか、思い出し笑いをしてくるらしい。

「屯所で土方さんの部屋に勝手に入つたり、永倉さんや原田さんや平助たちと騒いだり…。あと斎藤君にもいたずらしたりしたかも。山南さんも呆れてたつけ」

「土方君は静かに怒る人だつたなあ。それは鬼の形相で。実に怖かつたよ」

「僕にはそうでもないんですがね」

「わうなのかい？」

2人とも、少し遠い目をしているように見えた。

「わうやつて土方さんに怒られる度に、近藤先生が宥めてくれるんです。近藤先生はよく心配してくれましたよ、僕らのこと」

「近藤君は…それは大層君を可愛がっていたなあ。」

「…近藤先生にまた会いたいなあ」

「……わかつまた会いに来てくれるだらう?」

「ええ、きつと僕を迎えてくれるでしょう。」

「…………。」

沖田が言つた瞬間の異様な雰囲気といつたらなかつた。

(松本先生、すくへ変な顔してゐる)

「ははっ、意外、でしょ。試衛館にいた頃は堂々と発句してたもん  
ですかね。副長になつてからはコソコソしてましたよ」  
面白可笑しく彼は言つ。

「良い趣味だと思つがねえ」

松本もそんな土方を想像してしまい、思わず笑みが零れる。

「僕それから楽しくなっちゃつて。よく土方さんの発句集を見てそ  
れは怒られたものです。」

「君は本当に……」

松本は呆れ半分、微笑ましさ半分と言つた風である。  
鬼と恐れられていた土方にそんなことができるのは、沖田くらいいし  
かいないだろ？

「ある日、非番だったんで暇なもんだから、また土方さんの部屋に  
忍び込んだんですよ。」

「その発句集を見に行つたのか」

「ええ、暇でしたから。土方さんの号は『豊玉』ってんですけど、そ  
の時無防備にも土方さんの文机にほつたらかしにしてあつたんです  
よ、『豊玉発句集』がね」

沖田は本当に楽しそうに話す。

「それで、どうしたんだい」

松本も沖田の話に興味を持ち始めたようであった。

「それで、前見たときよりも句が増えていたもんですから、思わず発句集を自分の部屋に持つて行っちゃったんです」

「ははは…」

松本はただ苦笑いするしかないらしい。

「土方さんの句って、ほんとに不器用っていうか、武骨っていうか…。かなり面白いんです」

ふふふ、といひまで楽しそうに笑う沖田を、松本は久々に見た気がした。

「爆笑しながら読んでたんですけどね、その句の中に、一つ気に入るものがあったんですね。びっくりしますよ、何だと思いますか」

「なんだい、それは」

「僕の句です」

沖田のふわりとした温かさと切なさのようなものを含んだ笑顔。

「君の、句」

「ええ。僕の句です」

さしむかう 心は清き 水鏡

（水鏡…）

松本は素直に、きれいな句だと感じた。水鏡…とは、揺るがない精神。そして、清い心…。真つ直ぐな句である。

「それが、君の句なのかい」

「ええ、水鏡、って僕のことらしいんですよね」

沖田は照れているのかは分からぬが、頬を人差し指で搔いている。

「何故水鏡が沖田君だとわかつたんだい？」

「聞きたいでですか？…爆笑もんですよ」

「なんだい、また…」

\* \* \*

「さしむかう心は清き水鏡…」

京にいた頃。

沖田は自分の部屋に寝転がり、『豊玉発句集』を読みあさっていた。

(これ誰かに宛てた句だな)

《…タドタドタドタドタ》

「あ、来た」

外から聞こえる激しい足音。

《スパンツー!》

一気に襖が開いた。

「総司ー!」

…と、同時に聞こえた怒声。

「あ、土方さん。これ借りてます」

「何が借りただ阿呆が」

「やけに句が増えますね。」

土方は顔を真っ赤にしている。

「早く返せ馬鹿」

「もう読み終わったんでいいんですけど。気に入った句がありましたよ」

沖田は一言一言しながら土方に句集を返す。

「お前はいい加減にしろー今度これを盗んだらただじや措かねえぞ

「ね、土方さん、僕が気に入った句、知りたくないですか」

沖田は聞く耳無し、といった所である。

「別に」

「嘘だ、自分の作った句が気に入られたんだから、知りたいでしょ

「お前は何が言いたい」

土方は呆れたよつにはあつ、とため息を吐く。

「わしむかう心は清き水鏡」

「…」

途端、再び土方の顔が赤くなつた気がした。

「誰に宛てた句ですか。近藤さんかな」

水鏡、とは搖るゝのない、真つ直ぐな心。  
そして、清い心。

「誰でも良いだらうがそんなの」

「なんだ、近藤さんじやないんだ。…それじゃあ…花街の姑ひととか?」

「馬鹿言つてさじやねえよお前は

「山南さんか、平助…ではないか。あ、斎藤君だ」

「勝手にじり、馬鹿やうつ

そつ言い残し、土方は沖田の部屋を後にした。

「ちえつ」

(誰かなあ)

「お、総司じゃないか」

「あ、近藤先生」

開けつ放しの襖から顔を覗かせたのは、新選組局長、近藤勇だった。  
沖田総司が最も信頼し、尊敬して止まない人物である。

「今日は非番か

「ええ、近藤先生は?」

沖田はそそくさと座り直した。

「便所に行つていただけだよ」

「ははつ、なるほど」

「お前は襖を開けつ放しにして何してるんだ」

近藤は優しい笑みを浮かべる。

「僕は…えーと、その」

「また歳の句集を持ち出したのか  
盗んだ、と言わない所が近藤の優しさである。

「まあ…そんなところですかね」

こんな沖田も、近藤だけには頭が上がらないのだ。

「あいつの句、俺は好きなんだがなあ。総司も、気に入っているんだ  
だろ」

「まあ、気に入っていますが

(色々な意味でね)

そこに、「あれ、沖田はある」といふと咲がつぐ。

「あれ、近藤先生、土方さんの句を知ってるんですか」

「ああ知ってるよ。たまに歳が見せてくれる」

「へ、へえ…そなんですか」

さすがだ、と思わざるを得なかつた。あの土方が句を直ら見せるなど、想像もつかない。近藤はやはり偉大だと沖田は改めて感じた。

「あ、じゃあ！近藤先生、さしむかう心は清き水鏡、つて歌、知つ

ていですか」

「ああ……なんでもまたそれを……」

「あの句、何となく好きなんですけど、誰かに宛てて歌ったもので  
すよね。なんだか誰に宛てたのか気になっちゃって」

沖田も、近藤の前ではここまでに素直なのだ。

近藤は一瞬きょとんとして、

「はつはつはつ！あればな、総司。お前だよ」

盛大に笑った。

「え

「水鏡、つてのはお前のことだ。といつか、言つて良かつたのだろうか。…ま、歳には秘密だぞ」

そつ言つて近藤は一カツと歯を見せて笑つ。

「はあ……」

沖田は柄にもなく呆けている。

「じゃあ、俺は仕事があるのでな」

そう言つて近藤は襖を静かに閉め、去つていった。

\*\*\*

「あはははー！ほんと面白いでしょ、土方さん。素直じゃないんですねよあの人」

沖田は本当に楽しそうに、嬉しそうに笑つ。

「本当に仲が良いんだな、君たちは。…僕はね、沖田君」

松本は少しだけ空を見上げた。

「？」

「初めて西本願寺に来て、すうじへ驚いたんだよ。」

「はあ……」

「京での新選組の評判と云つたらそれは恐ろしかったからね。僕も御殿医だつたとはいえ少々は身構えていたところもあつたんだよ。しかし……新選組は僕が想像していたようなところではなかつた。」

松本がそう言つた途端に沖田は優しく笑つた。

「確かに短気な奴も多いし、血氣盛んな奴らばかりですけどね」「ああ。しかし、ある種の温かさを感じたよ。志を誠の旗に掲げ、真つ直ぐにその志を見つめる田は旨一緒だつた」

20

「あはは、懐かしいなあ」

また沖田は声を上げて笑つ。

「……君は、昔に戻りたいと思つのか」  
松本の口は切なかつた。

自分の目の前で笑つこの青年の死期はもうすぐそこへ迫つている。  
そして、彼のいた新選組は、バラバラになつた。  
何より、彼が最も守りたいと思っている人物は、亡くなつた。

その事実を、彼は知らない…はずだ。

「正直に言えば戻りたいに決まつてますよ。でも、そんなの叶わない。」

沖田が弱音を吐いたのを、松本は初めて聞いた。

「ああ。」

「何も守れない、戦えない僕は、もう死に行くしかないんです」

「何も守れない…など」

「いいえ、そうです。…でもね、松本先生」

「……」

「僕はもう戦えないんだから、役目が終わったんですね、きっと。こうやって戦えなくなるまで、僕は必死になつて新選組を、近藤さんを、守つてきたつもりです。みんなと共に、守り抜いてきたつもりです」

悲しく、優しく笑う沖田を、松本はあまり見ることができなかつた。込み上げるモノを、必死に抑えた。

「だから……だから僕はもう、死んだって構わない。こんなに幸せな時を過ごせたんだから」

「沖田君」

死ぬのは誰であらうと怖い。本心なのだらうが、彼は何を思つているのか…。

「早く……近藤さんには会いたい」

「ああ、やつひとつか、会える」

松本は今完全に悟つた。

彼は、知つてゐるのだらう。

近藤勇の死を。

周りがひた隠しにしようとして、彼は知つていたのだ。

「僕は今年の桜を見ることができたから、だからもう、心残りはありませんよ。桜なんてもう見られないと思つていきましたから。あんな綺麗な桜が最後に見られた」

「そんな氣の弱い事を言つたな。沖田君いらしくもないだらう……」

「動かねば闇にへだつや花と水」

沖田は、田を瞑っていた。

「……」

「土方さんよりは、上手いでしょ?」

彼は、笑っていた。

それは…安らかに。

松本は、一枚の和紙を見つめた。

(土方君が亡くなつて、もう何年になるか…)

時は明治。

松本はかつて沖田と話した場所にいた。

\* \* \*

動かねば 間にへだつや 花と水

彼の辞世の句である。

彼らしい句であると思つた。

花はきつと、桜だらう。

動かねば…戦わねば、彼は土方とは会えない、と。

(沖田君、もう花と水に、間はへだつていないだらう?)

あつどいかで、彼らは笑つてゐるだらう。  
(もつ戰う必要もないんだから)

戦いの無い世界で、永遠に生き続けるだらう。

ある時、新選組は永遠であると、永倉は言つていた。この世に残つた者、また逝つてしまつた者、やはりバラバラであるが、心はバラバラでは無いと。

(彼らが作り上げてきたこの世を、生き抜かねばならない)

\* \* \*

「また必ず来る」

「…ええ、楽しみにしてますよ」

近藤は今残暑しきりにしながらも、立ち上がった。

「近藤さん」

「なんだ？」

「今度、みんなでまた宴会をしましょ。やつと乐っこですよ」

「…ああ、こいなあ。やつとだ。」

E  
N  
D

(後書き)

こんな文章をここまで読んで頂き、本当にありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2609v/>

---

最後の桜

2011年10月9日16時37分発行